

地域学教育における学生の気付き  
— 鳥取大学2011年度「地域学総説」受講生のレポートから —

仲野 誠\*

Students' Awareness in Regional Sciences Education:  
A Review of the Students' Final Papers on Theory of Regional Sciences in 2011

NAKANO Makoto

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第8巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.8 / No.3

平成24年3月30日発行 March 30, 2012



# 地域学教育における学生の気付き

—— 鳥取大学 2011 年度「地域学総説」受講生のレポートから ——

仲野 誠\*

Students' Awareness in Regional Sciences Education:  
A Review of the Students' Final Papers on Theory of Regional Sciences in 2011

NAKANO Makoto

キーワード：地域学，地域学総説，地域学教育，学問と実践，学生の最終レポート

Keywords: Regional Sciences, Theory of Regional Sciences, education on Regional Sciences, academism and its practicability, students' final papers

## はじめに

鳥取大学地域学部が創設されたのは 2004 年 4 月のことである。それはこの時代に現れる諸課題に  
応えられる学問を創出しようとする思想のおよび実践的な試みである。それ以降，本学部は 3 年生  
の必修科目「地域学総説」などの授業などとおし，地域学に輪郭を与えようと努めてきた。それ  
は本学部の教員のみによる試行錯誤にとどまらず，様々な地域の実践者や学生たちの力をも借りな  
がらの営為である。

2011 年 4 月には『地域学入門——〈つながり〉をとりもどす』（柳原邦光／光多長温／家中茂／  
仲野誠編著，ミネルヴァ書房）を上梓し，本学部の現時点での成果を世に問うた。その本は「客観  
的・構造的視点」，「生活から考える視点」，「〈わたし〉からの視点」，「移動の視点」の 4 つの大きな  
視点で構成されている<sup>1</sup>。それに加えて，地域において重要な実践を丁寧に積み上げてきた 13 人  
によるコラムも配置した。地域学はすぐれて実践的な学問であり，大学の外に出ることによって成立  
するという特徴もあるからだ。2011 年度の「地域学総説」では初めてこの本をテキストとして使用  
した。

本稿では，2011 年度の鳥取大学地域学部「地域学総説」における受講生 200 余名のレポートから  
みえてくる本学部の地域学教育の現時点での成果やこれからの課題を描いてみる<sup>2</sup>。

## I. 本稿の目的

### 「地域学総説」の概要

「地域学総説」の内容については，本号所収の柳原邦光『「地域学総説」の挑戦 6』に詳しいので  
そちらを参照されたい。ここではその授業の概要を簡単に確認することと定める。2011 年度の「地域  
学総説」の授業構成は次のとおりであった（表 1）。

\* 鳥取大学地域学部地域政策学科

<sup>1</sup> 2011 年度の「地域学総説」では 5 つ目の視点としてそれに「歴史性」が加えられた。

<sup>2</sup> この年度の地域学総説の受講登録者数は 211 名であった。

表1 2011年度「地域学総説」授業構成

<b>■第1部 地域学の視点</b>		
4/13	第1回	柳原邦光 (地域学部教員) 「希望の学としての地域学」
4/20	第2回	光多長温 (地域学部教員) 「地域主義の系譜と地域学」
4/27	第3回	矢野孝雄 (地域学部教員) 「地形から地域を読む」
5/11	第4回	家中 茂 (地域学部教員) 「生活のなかから生まれる学問」
5/18	第5回	仲野 誠 (地域学部教員) 「生きられる地域のリアリティ」
5/25	第6回	児島 明 (地域学部教員) 「人の移動から地域を問う」
6/3	第7回	第1部まとめ
【第1回目レポート】		
<b>■第2部 歴史性とながりの回復</b>		
6/8	第8回	柳原邦光 (地域学部教員) 「なぜ歴史性なのか—フランス史の事例から—」
6/15	第9回	岸本 覚 (地域学部教員) 「地域意識と歴史性—日本史の事例から—」
*6/22	第10回	内山 節 (哲学者) 「『里』 (ローカリティ) の思想と歴史性」
*6/29	第11回	森まゆみ (作家・市民文化活動家) 「まちの暮らしに生きる歴史をみつめて—『谷根千』の実践から—」
*7/6	第12回	吉本哲郎 (地元学ネットワーク主宰) 「地元学—足元をみつめてつながりを取り戻す—」
*7/13	第13回	向谷地生良 (浦河べてるの家ソーシャルワーカー) 「『自分自身で、共に』つながりを取り戻す—『個人苦』から『世界苦』へ—」
7/20	第14回	第2部まとめ
<b>■第3部 全体まとめ</b>		
7/27	第15回	学生ディスカッション
【第2回目レポート】		

(※は外部講師)

「第1部」は本学部の教員による講義で、『地域学入門』のエッセンスである4つの視点を中心に「地域学の視点」を提示した。そして第1部終了後に、第1回のレポートを学生に課した。その課題は次のとおりであった。

#### 地域学総説第1回レポート課題

第1部講義をふまえ、自分が受け止めた「地域学」について説明しなさい。

(説明する相手として、例えば家族や友人、就職活動の面接官などを想定するとよい)

第1部の次は「第2部 歴史性とながりの回復」で、これまで本学の地域学が十分扱ってこなかった「歴史性」をテーマとして講義が組み立てられた。最初に岸本・柳原の2名の教員がそれぞれの専門である日本史とフランス史の視点から、地域学に歴史性を導入する意義について話した。その後、外部講師4名の講義が続いた。

最初は哲学者の内山節が『里』(ローカリティ)の思想と歴史性というテーマで講義をした。

次いで東京在住の作家・市民文化活動家の森まゆみの「まちの暮らしに生きる歴史をみつめて—『谷根千』の実践から—」が続いた。そして熊本県水俣市の地元学ネットワーク主宰・吉本哲郎の「地元学—足元をみつめてつながりを取り戻す」の講義があった。最後に北海道浦河町にある精神障害等をかかえた当事者の地域活動拠点・浦河べてるの家のソーシャルワーカーである向谷地生良が「『自分自身で、共に』つながりを取り戻す—『個人苦』から『世界苦』へ—」というテーマで話した。そしてこの授業全体のまとめの回をもった。

最終の授業の後、第2回レポートが学生に課された。その課題は次のとおりである。

#### 地域学総説第2回レポート課題

まず、第2部の講義（とくに内山節、森まゆみ、吉本哲郎、向谷地生良の各氏）を聴いて、そのエッセンスは何か、自分が受け止めたことを記述しなさい。次に、それを手がかりに、地域学に関する自分の考えを深め、記述しなさい。レポートのタイトルは、地域学に関して深めた自分の考えを適切に言い表すものをつけなさい。

本稿で扱うのは、この「第2回レポート課題」に対する200余名分の全学生レポートである。

### 本稿の目的

今年度の第1回レポート課題は上述のとおり「学生が受け止めた『地域学』」の説明であるが、これは本稿では扱わない。学生の「地域学」への向き合い方については、2010年度の「地域学総説」の学生レポートのレビューで既に整理・分析しているからである（仲野 2010）。むしろ本稿では、学生の「地域学」そのものの捉え方ではなく、学生はこの授業で講義した4人の実践者の経験をどのように受け止めたのか、そしてそれを手がかりに自分なりの地域学をどのように深めようとしているのかということを中心に考察する。それが第2回レポートで問われた課題である。

ただし、本稿で試みるのはレポートの「分析」ではない。むしろここでは学生たちが授業からどんな気づきや収穫を得たのか、その主なものをピックアップし、カテゴリー化して整理したい。

以上、本稿の目的は2011年度「地域学総説」の第2回レポートに表現された、外部講師の実践者の経験を中心にこの授業を学生たちがどのように受け止めたのかを整理し、これから地域学教育を発展させていくためのひとつの資料として提示することである。

### 整理の方法

前述のとおり、本稿で扱うのは「地域学総説」第2回レポートの全受講者分である。まずそれらに全て目を通した。そしてレポートに表現されている学生がこの授業で得た「収穫」のうち、筆者が「意味あるもの」と判断したものを全て抜き出した。その「収穫」は、地域学をこれから鍛えていくための有用な気付きともいえる。そしてレポートから抜き出された学生の言葉を大きくカテゴリー化して整理した。

「意味あるもの」の選択基準は筆者の選好によるものであり、「恣意的」といえる。ここで選択されている言葉は、この授業における学生の「収穫」あるいは地域学の今後の発展にとって生産的と思われる「気づき」のみである。つまり学生が学べなかったことや本質的な意味がないと思われることは意図的にとりあげなかった。これは「いいとこどり」とも言え、この方法に対する批判は想定される。たとえば「この方法は地域学教育のポジティブな効果だけに着目している」あるいは「こ

の授業が達成できなかったことや失敗点も明らかにすべきだ」という批判である。

繰り返しになるが、本稿は今年度の地域学総説が「生み出したもの」あるいは「達成したこと」を考察するためのデータを抽出することをねらいとしている。この授業が「達成できなかったこと」や「失敗したこと」を明らかにするためには、同じレポート群から違う質のデータを抽出する必要がある。そしてそのためには別の作業を準備すればいい。あくまでも、本稿では「地域学総説」の第2部から学生が学んだことに着目するという限定のもとに議論を展開していく。それは、学生や講師たちの経験や力を借りながら「地域学」をつくり上げていこうとする立場に立っているということである。また、そのような力の集合がまた新たな実践を生み出していくということを想定するからだ<sup>3</sup>。

本稿は、学生のレポート群をいったんほぐして、新しいひとつのレポートに編みなおしたようなものである。それは言うてみれば、もともとはひとりひとりに属する1本1本の個人的なレポートを、総体としてとらえなおすということである。それはひとりひとりの学生がそれぞれ個人として何を学んだのか、その量や水準を点検／評価するような「学生に対する評価」という発想ではない。そうではなく、ひとりひとりの学生の気づきをいったん総体的にとらえ、そしてその全体をほぐして編みなおすことによって、「地域学総説」の受講者である私たちが総体として何を学んだのかということを描こうとする試みだ<sup>4</sup>。「専門家である教員が学生に教える」という一方的なスタイルではなく、教員と学生がそれぞれの力を共有しながら、共に学ぶ／地域学をつくりあげるという関係性を想定している。だから本稿では個々の学生が学ばなかったことには（ひとまず）関心を向けないのである。

以下、本稿の構成を説明する。「第2回レポート」に記述された学生の学びを大きく次のとおりカテゴリー化し、順に紹介する構成になっている。まず学生の「講師の生き様への反応」をまとめ、それをきっかけとする自己の「ポジショニングの振り返り」を提示する。そしてそのような一連の気づきが「実践／行動すること」、「つながりの創出」そして「地域学の可能性」への発想と展開していく様子を提示しつつ、可能な限りそのプロセスにみられる学生の変容のダイナミズムを描いてみたい。

<sup>3</sup> 本稿におけるこの立ち位置は、環境社会学の鳥越皓之の議論に拠っている。「学問の実践」に関する議論において、鳥越は自らの立場を次のように主張している。「自分としては、現場に住む地元の人たちという『他者の力』を自分の力と合体 (synergy) させることで、自分の研究を進めてきたので、合体という作業が結果的に実践的になるという考え方をしている。／この考え方にもとづいて、『生活環境主義』というモデルをつくってみたいだが、このモデルの欠点としてしばしば指摘されることは、地元の人たちに対する批判がないという点である。それは当然そうで、地元の力を借りるという学問的立場だから、地元から学ぶということはあっても、批判ということとは少ない。したがって、これは欠点であるという指摘が当を得ていることは認めるが、これがまた固有の研究を生み出せる長所ともなっているので、おいそれと捨てるわけにはいかない」(鳥越 2006:278)。

<sup>4</sup> この発想は、哲学者の鶴見俊輔がいう「アンラーン」という作法に近い。鶴見は戦前ヘレン・ケラーの「私は大学でたくさんのことを学んだが、そのあとたくさん、学びほぐさなければならなかった」という言葉に出てくる「学びほぐす (=アンラーン)」という作法について次のように言う。「型通りにセーターを編み、ほどいて元の毛糸に戻して自分の体に合わせて編みなおすという情景が想像された。大学で学ぶ知識はむろん必要だ。しかし覚えただけでは役に立たない。それを学びほぐしたものが血となり肉となる」(鶴見 2010:51-52)。本稿は「地域学総説」の受講生が「総体」として学んだことをいったん学びほぐして、再度私たちのものにしていくためのささやかな試み、あるいはそのための資料なのである。

## II. 講師の生き様への反応

### 信念をもつこと、本気であること

まず学生のレポートで数多く目立ったのは、外部講師4名の「生き様」に対する反応である。たとえば地域環境学科の学生は「誰一人現代の社会に妥協している人はいなかった」という素朴なコメントをしている。また次のような表現も目立つ。「私はこの人たちは常に全力で生きていて、すごく濃い人生を送っているなど思った」(地域政策学科)、「こんなに中味のある人生を送っておられる方々に話を聞いてよかったと思っている」(地域政策学科)あるいは「これまでやこれからの生き方を問われているような気がしました」(地域教育学科)。

ここに書かれているのは「地域学」の内容以前のこともかもしれない。つまり「ディシプリン以前」のこととして、まず問題への向き合い方あるいは姿勢、態度の次元にかかることがらである。注目すべきは、学生たちは講師たちの「ディシプリン以前」の姿勢に非常に強くひきつけられ、敏感に反応し、講師たちの姿勢あるいは覚悟から実に大きなエネルギーをもらっているようにみえることだ。次に学生たちの言葉をいくつか並べてみよう。

今回話をしてくださった方々は自分自身でよく社会をみて納得できる問題を見つけているのである。そしてそれを徹底的に考えようとしている、いわば社会に対して本気になっているのである。(地域政策学科)

外部講師の方々には当事者意識が強く、地域の問題を地域に住む自分たちの手で解決するという確固たる意思があったが、なんとなく生きており、何かに問題意識を抱えていても、周りが何とかしてくれる、どうにでもなるといったふうに自分で問題と向かい合うことを避けている人々が多いのではないかと思う。(地域政策学科)

地域について学ぶことが本当に地域のためになるのか、そもそも本当に自分は地域に興味を持っているのか、今まで漠然としていた目標が完全に無くなった瞬間でした。講義を聴きながら、私はよくその時のことを思い出していました。そして、どうしてこの人たちは真っ直ぐに一つの事に人生をかけられるのだろうと考えていました。(地域政策学科)

私も先生方のように、人々の幸せのために自分の人生を捧げていたら、たいへんなことはたくさんあっても、きっと後悔の無い素敵な人生が送れるであろうし、ぜひ現実のことにしてみたいと思う。先生方がされているほどの偉大なことはできないかもしれないが、今回の講義で学んだことを実践し、小さなことでも自分にできることを積極的に見つけて、人々の幸せのために貢献していきたい。(地域教育学科)

「社会に対して本気になっている」、「問題と向き合うことを避けない」、「真っ直ぐに一つの事に人生をかける」、「人々の幸せのために自分の人生を捧げる」というような、非常に素朴でストレートな反応がここにみられる。これは大切なことかもしれないが、一方で「非合理的な」感情の次元の問題であり、「論理的に」物事を考えることを期待されているアカデミズムにおいては取り上げるに値しないこととみなされるかもしれない。しかし、むしろ現実的に学生たちがこのような「感情

の」次元において強い反応を示したという事実をどう受け止めるか、ということが研究者／教育者に問われるのではないだろうか。このような現象はアカデミズムにおいては単なるノイズに過ぎないかもしれないが、これまで見過ごされてきたノイズに耳をすますことによって立ちあがる問いというものがあるのではないだろうか。

学生たちにとって、それは驚きを越えて一種の迫力を伴うものだったようである。「問題から逃げない」ということ、そしてその姿勢から生まれる「物凄い説得力と緊迫感」を次の学生たちは受け止めている。

この4人の方達は、他の人では気付かないかあえて無視をしている問題に果敢に挑み、それを私達に提示してくれたのだ、と感じた。……話を面白いと感じたのは、もちろんその人柄や実体験もあるだろうが、私たちが分かっているながら無視してきた、あるいは気付かないふりをしてきた問題に、逃げずに戦ったからなのではないか。(地域文化学科)

外部の講師の方たちの話には物凄い説得力と緊迫感のようなものを感じた。……一つ一つの言葉に重みを感じる……。 (地域文化学科)

さらには、次の学生たちは講師の存在自体から何か大切なものを学び取ったようである。繰り返すが「何か大切なもの」という曖昧模糊としたもの、あるいは非合理的な「何か」はノイズかもしれない。しかしこれを学問は十分に扱ってこなかった、あるいは扱いきれなかったのではないだろうか。この講義の受講生であった学生たちにはその「何か」が確実に、かなりの力を伴って迫ってきたようだ。これを私たちは、あるいは地域学は、どのように受け止められるのだろうか。

地域学総説の、あの教室の中に、内山さん、森さん、吉本さん、向谷地さん、その人自身が今まさに私と同じ空間にいるということだけでも、私にとっては圧倒されることだった。……当たり前前をあたりまえにやっていることにそのすごさがあるのではないかと感じた。(地域政策学科)

四名それぞれの体験を聞き、それぞれの人生の一部を疑似体験させてもらったように感じる。第一部の先生方<sup>5</sup>のお話では、どこか遠くに感じられていたものが、外部講師のお話では話される方の手の中に言葉、想い、その時の情景があり、言葉や表情からそれが伝わってくる気がした。自分が体験したという事実、自分がこの人から直接聞いたという事実の強さを感じた。(地域文化学科)

上の学生は講師の人生を生きたような感覚を得たということなのだろう。そして学部教員の講義では「どこか遠いものだった地域学を、講師の講義では近く感じる事ができた。また、「自分がこの人から直接聞いたという事実の強さ」とはいったいどういうことなのだろうか。学生に直接話しているはずの(研究者である)学部教員の話とは何か違うものを学生は受け取ったのだ。この

<sup>5</sup> 第1部で講義した本学部の教員たちを指す。



伝わり方の違い、伝わる力の違い<sup>6</sup>は単に「貴重な一回きりのゲスト講師だから」という単純な理由では説明できないように思う。

「地域学総説」第2部の講師のひとりである向谷地生良（浦河べてるの家ソーシャルワーカー）には『技法以前——べてるの家のつくりかた』という著書がある。そのなかで向谷地は、ソーシャルワーカーが専門家として「何をしたか」あるいは「何をしなければならないか」と問われてしまうことに対する注意深い懐疑を示し、「何をしてはいけないか」という発想の重要性を説いている。向谷地のソーシャルワーカーとしてのスタンスは、「精神障害をもつ人たちのユニークかつ混沌とした“経験”に潜む可能性に着目すること」である（向谷地 2009:4）。それは専門家は「何もしないこと」を意味するのではなく、「当事者」と「場」のもつ力を信じ、当事者の力を引き出していくという方法なのだ。

翻って、地域学教育における実践者の経験の力と、いまこの時代の最先端を生きる若い学生の感性の力がどのように出会うことができるのか。あるいは、それに地域学教育を担う「専門家」としての教員はどのように関わることができるのか——講師の「生き様」に対する「ディシプリン以前」の学生たちの反応は、地域学教育のこれからの展開の仕方にたいへん重要な問いを突きつけているように思える。「生き様」に対する学生の反応を、それは「専門的な学問」上の問題ではないとして退けることができるのだろうか。これは深い考察を要するだろう。このことに関して、次のような学生のコメントもあった。

どの講師の方も、実際に現場を見て、考え、行動されている方ばかりで、それによりいままでの第1部講義よりリアリティがあり、よりそのことを実感することができた。（地域環境学科）

それぞれの現場で20年から30年間の格闘を続けている講師たちの話が学部教員よりも「リアリティがある」というのは当然のことかもしれない。そしてそれは実践者と研究者との役割が違うというだけのことで、それを上手く分担すればいいのだ、という議論に落ちつくだろう。

おそらくそれは正論なのだが、少なくともここで重要なのは、「地域」にかかわるいくつもの立ち位置にいる多様な担い手たちが、単に役割分担をするだけではなく、お互いの経験や力を排除しあわない形でどうしたら地域学を創出することができるのだろうか、という具体的な問題ではないだろうか。たとえば、かなり限定的にいえば、地域学教育をうまく展開するために実践者と研究者はいかにしてコラボレートすることが／出会うことができるのか、という課題が浮かび上がるということである。その問題を考察することそれ自体は本稿の目的ではないが、学生のレポートからもこの基本的で重要な課題は浮き彫りにされるということをここでは指摘しておきたい。

## 生き生きとしたオーラ

講師の生き様への反応が「ディシプリン以前」の問題だとしたら、それよりもさらに漠然としたコメントも数多くみられた。それは講師のもつ「オーラ」や「生き生き」していることなど、もはや「雰囲気」の次元における反応である。それこそ「ディシプリン以前」のようなことがらであり、

<sup>6</sup> もちろんこれはどちらに「力がある／ない」というように量の次元で序列化するような問題提起ではなく、両者の「力の質」が異なるのではないかと、ということである。

場合によってはこのような印象論はアカデミックなレポートに書くに値しないという評価を受けるかもしれない。一方で、これだけ多くの学生が、実に真剣にこの雰囲気ひきつけられ、そしてそれによって地域学に誘われているように読めることを私たちはどう解釈したらいいだろうか。

以下、この類の反応をいくつか列挙してみよう。

講師の方全員が、とてもキラキラしたオーラを放っていたことです。自分の仕事にやりがいや強い自信をもって、私達に伝えようとされている姿が見え、素晴らしいなと思いました。(地域文化学科)

外部講師による講義はどれも地域学を学ぶ上で、心に響くものばかりであった。(地域文化学科)

外部講師の方の印象は、思っていたよりもやわらかく、まるで近所に住んでいる人達ようだった。しかし、どの講師の方々も今回の地震について深く考え、そして行動している姿にさまざまな社会の切り口を見せられて私は現場感というものに憧れをもっていたことに気付いた。(地域文化学科)

講師の方々はそれぞれ一人一人違う苦しみを受けているのに、皆さんがすべてを楽しんでいるような姿には非常に感心しました。物事を楽しみながら生きる姿勢というものが大切で、さらに自分の周りにあるものの大切さを改めて認識し、自分のいる地域の歴史、環境、未来のことを考え行動することが重要なことだと思いました。(地域文化学科)

どの方もたいへん生き生きとしてそれぞれの経験を語っておられたということだ。すべての言葉が生きていて、心にすんなり入ってきた。それは、それぞれの外部講師の方にそれぞれの「地域学」の形があり、それぞれに誇りをもっておられるからだと思う。それぞれの専門家が客観的に語るのではない、地域という場所で、地域の人々と一緒になって考え、動くことで、初めて見えてくる、1人1人の「地域学」であった。(地域文化学科)

「とても生き生きとして見えた」(地域文化学科)講師の経験から学ぼうという意味がこれらのコメントから読み取れるようだ。標準化された知識を教えるという一般的な教育のスタイルとはかなり異質なこの講師と学生の共鳴をどのように捉えるべきなのだろうか。「地域学はいかにしてあるのか」という水準の問いにおいても、あるいは、地域学教育の具体的な方法論の水準においても、教員自身が問われる問題である。

## 他人任せにしない

以上、講師が醸し出す「雰囲気」の力に対する学生の反応をみてきた。では次に、もう少し具体的に地域学に関連しそうな問題をみていこう。それは講師の「当事者性」の問題である。多くの学生たちが感銘を受けているのは、問題における講師たちの当事者性の存在であり、「他人任せ」にしない態度でもある。このような基本的な態度により、学生たちは講師たちに信頼を置いているように読める。

4人の方のお話を聞いて感銘を受けたことは「他人任せにしない」ということである。他人任せというのは自分が生きている基盤、基礎、根元の部分を他人に任せるのではなく自分たちでやっていくということである。(地域政策学科)

先生方が伝えたかったであろうことに、共通しているものがあつたように思う。それは「信念をもって主体的に活動に携わる」ことが大切だということである。何でも他人事だと思わずに、自分のことだとして捉え、熱意をもって真正面から向き合う。自ら率先して動き、自ら学びを手にしに行く。(地域教育学科)

私事として問題を捉えたときにこの気持ちに熱意が伴う。それは真の熱意であり、この真の熱意が人の心を動かすのだと感じた。外部講師の方たちの話しにわたしたちが力強さや重みを感じたのは、考える以上に体験していること、そしてそこからくるリアリティ、その場からの視点や現場感、熱意を感じたからではないか。(地域文化学科)

「他人任せにしない」、「自分のこととして働きかける」、「私事として問題を捉える」——講師のこのような態度が学生に「力強さや重み」を与えていることがよくうかがえる。

## 経験・行動の力

学生がひきつけられる講師のたたずまい、雰囲気あるいは当事者意識／当事者性は、おそらく数十年にわたって課題を「当事者」のひとりとして背負い込み、そして格闘してきたその経験に裏打ちされているのだろう。これも「ディシプリン以前」の問題だ。しかしこの力に学生たちが深く響き、力や気付きを得ているということから、地域学教育の展開のヒントがあるのかもしれない。

次に「行動する」「自分から動く」というようなキーワードで書かれたコメントを紹介する。

全員自分の目でしっかり見たことを自分なりに解釈し、そこに浮かび上がった問題を実際に自分なりに取り組んでいくという姿勢がある。(地域教育学科)

行動というものがどれぐらい密接に地域とを結び付けているかがよくわかってよかった。今回の講義を受けて、失敗してもいいから、行動からはじめてみようという気持ちにさせてもらい、自分自身学科の方々への挨拶や、身の回りのできることから自分の周りの地域を変えていこうと思った。いつもは考えるだけで行動することがないが、……行動こそが、地域学の根底を成すものだなと思った。(地域環境学科)

「理論より行動」だ。机にへばりついて何かが変わるなら、それは地域学ではない。実際外に出て行動する。実践する。そうすることで様々な視点から「地域」が見える。実際、外部講師の4名のお話も、自分たちの実践や実経験がもとだった。そこからくるリアリティに、思わず感銘を受けた。行動で人は動かされることを再認識した。(地域環境学科)

もちろん、『理論より行動』だ。机にへばりついて何かが変わるなら、それは地域学ではない」

というのはいささか乱暴な議論であり、「あれかこれか」式の二項対立で「理論と行動」をとらえるのはあまり生産的ではないだろう。また、「悪しき現場主義」とでもいえる「とにかく外へ出る」こと（だけ）を是とし、理論の役割を省みないのも、少なくとも地域学を鍛えていくのに生産的ではないと思われる。ただし、その一方で、学生たちのこのストレートな反応は「理論の使い勝手」あるいは「学問の役立ち方」への懐疑の表現かもしれない。

そのような「熱意」を伴う「行動」への着目は、講師たちがひとりで実践しているのではなく、共感する仲間たちを巻き込んでいるのだろうという気付きをも生む。「熱意」や「感動」で「人は動く」ということへの着目である。

人は感動で動く、人の熱意で動くのだと学んだ。そしてその困難に対して逃げずに正面から向き合い、考え立ち向かっていくのである。しかし、それは簡単なことではない。私はなぜ、この方たちはとても大きな困難に対してあきらめずに、くじけずに立ち向かうことができたのか疑問に思っていた。それは地域の問題を私事として似ない、実際に体験、実践したからであると思う。そして実際の体験や経験の中で芽生えた意識が熱意となり人を動かしたのである。何度もあきらめかけたり、くじけかけたりされただろうが、まちを変えようとしている人たちの熱意に動かされた人がきっと支えてくれただろう。(地域文化学科)

みなさんが、自分の足を使い活動を進めているということ、日ごろ目に付かず、気がついておそとしておくような小さな問題を、危機感をもってとらえ、改善していこうと策を練るということだった。きっと取り組む活動が身近だからなのだろうが、必ず4人の先生方の回りには協力してくれたり、賛同してくれたりする仲間となる人がいる、つながりがあるというのが印象的であった。(地域教育学科)

以上の学生たちの反応について「学生たちはまだ理論の重要性がわかっていないのだ」というとらえ方もできよう。ただし、彼らのリアリティにおける理論のごたえ（希薄さ）もひとつの現実である。理論が「専門家たちの『村』」（内山 2011:177）の中だけで消費されていくことのないようにするために、学生の声から意味のある問いを立てていかなければならないのではないだろうか。

### Ⅲ. ポジショニングの問題 あたりまえの懐疑

2節までは学生の講師への反応を挙げてきた。ここからは、講師の姿が学生の鏡となって、学生が自分自身のポジショニングについて触れているコメントを取り上げ、講師の話が学生の内省を促していることを考えるための材料を提示したい。それは自分自身のポジショニングにかかる問題であると同時に、学問や観察者／研究者のポジショニングへの問いでもある。

まず自分自身の反省や相対化について言及しているコメントをいくつか挙げる。

私自身、振り返ってみれば地域学に関係のあるような体験はここに挙げた以外でもしているのではないかと考える。ただ、もうそれが私という歴史の中であたりまえのことになってしまい、闇に葬られてしまっているのではないか。こんな自分に反省するところからはじめようと思う。地域学総説は、1年の時の地域学入門よりもさらに自分と地域学とを近づける

役割をしてくれたように思う。……当たり前の見直しは、今、地域学に、そして私自身に求められていると考える。(地域文化学科)

「気付く」ということの重要性について、この地域学総説を受ける前よりもさらに考えるようになった。そして「気付く」には、他の人の意見を聞き、自分と向き合うことが重要だ。第2回レポートのうち、何人かの他者のレポートを拝読することができるので、私は今からその他者のレポートを読むことをわくわくしている。そしてこれから様々なことに「気付いて」いきたい。(地域文化学科)

地域学と向き合っていくときに大切なことは、……常識にとらわれないことである。……日々の生活では見えてこない、他者の言葉を聞かないと知りえない、現地に行ってみないと分からない、このような事がまだまだたくさんあって、私達の知らない世界はたくさんある。その中で常識どおりの視点、考え方をもってそのような世界に飛び込んでいっては今までと何ら変わりはなくなってしまうので、そこで人とは違った視点をもてる常識破りの人であるというのが必要なのではないだろうか。(地域政策学科)

この地域学総説という講義を通して私たちはそれぞれの先生や外部講師の方の〈地域〉についての様々な視点や実際の取組を聞くことができたけれど、……“気付き”を日常の中で意識するきっかけをもらったという段階なのだ。それは地域学を考える第一歩であるけれども、それを実際に自分のものにできなければ意味がないし、自分自身の地域学をつくるということは、これからその気付きを生かして自分が何を見て、何に触れて、そこから何を感じ、何を考えていくかにかかっているのだと思う。(地域教育学科)

また、自己の内省にとどまらず、学問自体のポジショニングという問題にも疑問は広がっていく。

私たちが生活している足もとを見つめなおす、すなわち、当たり前を当たり前としてとらえないことから始まる学問でもあるとも感じている。……こえは4名の講義を通して感じたことだ。……当たり前を当たり前としてとらえないことではじめてこれまで見えてこなかったものが見えてくるのではないだろうか。見えないはずの死者の声や、精神患者が抱えているであろうメッセージというのは見ようとすることで初めて伝わってくるのだ。(地域政策学科)

いうまでもなく「当たり前を当たり前としてとらえない」相対的な視点を提供するのは地域学に限ったことではない。しかし、やはりここで重要なのは、学生たちは地域学をとおしてこのような視点を獲得しつつある、あるいは複数の視点のとり方を考えるようになったということだろう。

これは「客観的な視点 - 主観的な視点」という二項対立図式への疑問をもうみだす。つまり観察者の視点をどこに置くのかという問いだ。

以前、地域学は第三者の視点から地域をみて、地域を解き明かす学問だと思っていたが、この講義を通して実はそうではないのではないかと思うようになった。客観的な視点で見ると

ではなく、まずは当事者として、主観的な視点をもって問題解決に取り組むのが地域学の始まりなのではないかと思う。もちろん……第三者が加わることもあるが、それでもその地域の当事者と同じ視点に立つて行うのが地域学では重要な点だと思う。(地域政策学科)

「主観的な視点」が「地域学の始まり」だとし、「地域の当事者」をより重要視する上のコメントに対し、下のコメントはもう少し慎重な態度を示している。

専門家でなく自分達で調べることが大事だとは思いますが、かといって専門家が不必要だとは思いません。むしろその専門性は問題を考える上で必要不可欠だと思います。私は地域の問題に専門家として関わるときに、専門家は単にその問題について調査をしたり答えを出したりするだけの専門家ではなく、その地域に住んでいる人たちとともに調べ考えていきその中で専門性を生かして必要なアドバイスを与えるような手助けができるような専門家である必要があるのではないかと思います。(地域教育学科)

確固たる解答は出ないものの、ここに専門家の役割について丁寧に考えていこうという学生の意思が読み取れる。

## 当事者性

自分の立ち位置、あるいは専門家の役割に関するこれまでの問題と関連してよくみられたのが「当事者」あるいは「当事者性」をキーワードにしたコメントである。たとえば、次のコメントにみられるように「問題から逃げない」とか「当事者意識を持つ」あるいは「当事者になる」ということへの関心が記述されている。

私がいる地域を私が見ることが必要で、そしてそうすることで見えてきた問題点を解決するために自分自身で考え、さらに実践することが地域学なのだ。……向谷地さんのように自分がいる地域を想像して見えてきた問題点から逃げないという姿勢は、私と地域が「本物の」関係になるために絶対に必要なものであると思った。(地域政策学科)

地域学総説で様々な活動をされている人たちの話を聞いて、それらに共通していると感じたことは、ある問題や起こっている事に対して専門家に調べてもらうのではなく自分で調べまわとめることで自分自身その問題に対して理解を深めていこうとしている事です。……自分達が調べることでその問題を住んでいる人々が本当の意味で知ることができ、それは専門家が調べるよりもずっとその地域のためになると思いました。ここで言う「本当の意味で問題を知る」とは、自分達の問題を自分達の問題であると自覚すること、当事者意識を持つことである。(地域教育学科)

地域学とは何かを考えること、つまり、地域の中で生きるとはどういうことかを考えるためには、その地域のリアルな「当事者」になることが重要であると感じた。その地域の真の問題・課題は、その場で生活する人間でなければわからないし、その問題を実際にどうにかして解決し、プラスへ方向転換していくのもその場で生活する人間でなければならぬだろう。

……その場のリアルな「当事者」であることは、地域学を考えるうえでは前提条件ともいえるだろう。(地域教育学科)

次のコメントは、さらに踏み込んで考察し、「問われているのは私達」と一般的な「問い-問われる」という関係性を逆転させている。そしてこの言葉こそが地域学を表しているとまで言う。

地域学とは人が安心して幸福に生きていくために、生活できる場を実現するための手段であり、そのために必要なのは、地域を自分のこととしてとらえる視点であると感じた。地域に対して自分が思うことや自分がどう行動していくかは、必ず自分に返ってくるものであり、決して他人事ではない。吉本さんの「問われているのは私達」という言葉が、地域学を表す言葉なのではないかと思った。地域を、そこに暮らしている自分を含めて見つめ直すこと、自分がどのように地域と関わっているかを考えることが大切である。これは地域学だけに限ったことではなく、人との関係でも大切なことだと思った。相手を通して自分自身を見つめなおすということは、今現在も、そして社会に出ても必要な視点だと思った。(地域文化学科)

地域学は自己と他者の関係性を考えたり、「相手を通して自分自身を見つめなおす」という、より普遍的な問題にまで発展していくものだと言っているコメントである。

## 自分にできること

「当事者」とは異なる表現であるが、類似の議論として「人任せにしない」や「当事者を置き去りにしない」という視点からの内省的に思考するコメントもあった。たとえば次のコメントである。

第2部の講義を聞いて、私が受け止めた重要な点は……人任せにしない、当事者を置き去りにしないという姿勢である。……このような「人任せにしない」姿勢は、今回の地域学総説のキーワードでもある、「(つながりを)とりもどす」ということと背中合わせになるものであろう。(地域政策学科)

重要になるのが「生活の場の、生活者からの視点」である。……単なる観察者や傍観者ではなく、対象者として内側にいる自分が体験・理解・実感することは、地域の力を知るきっかけとなる。そして、自分の足もとにあるものき気付き、知ることとは、先人の生きた証を学ぶことでもある。……何らかの連続性や関係性が目に見えるような、加えて、過去が記憶として受け継がれる場である地域を、人任せにすることなく、問題意識をもって受け止め続ける態度と行動、それこそが地域学を考える上で、というよりも、地域に生きるひとりの人として重要なことだとわたしは考える。(地域文化学科)

自分から行動を起こすことが大切だと強く感じた。……今回の講義で……何か自分からやれることを見つけないと感じた。そうすることは、地域を理解することにつながっていき、また地域のつながりに自分が組み込まれることを実感できると考える。……他人任せにせず自分自身で生きるということを考えるということだ。(地域文化学科)

これらはいずれも、自分を棚上げしないで地域に関わろうとする姿勢と学問とを接合させようとする意思であろう。

これとは違う言葉として「他人事を私事として考える」というコメントもあった。

他人事を私事として考えることの重要性について考えることとなった。「この人の現実がもし私の現実ならどうなのか」という問いを突きつけられた。これまで、生の声を聴くことの重要性や現場を訪れることの大切さを学んだはずである。それにもかかわらず、私のなかで、他者の現実の向き合うことの重要性に気付かずにはいた。……地域を考えると、そこに暮らす人々に目を向け、その人々が置かれている立場に着目し、自分自身がその立場に立とうとするものの重要性を学んだ。(地域政策学科)

ここにも自分を棚上げにせず、問題に向き合おうとする覚悟や意思が表現されている。

## 地域に問われる

地域政策学科のある学生は「どれだけ地域を自分のこととして捉えられるかが大切だと思った。……地域と自分を一体化して、影のように切っても切り離せないものにするここそが私たちに求められている」と述べている。ここにも、観察者と観察対象を切り離そうとしないスタイルへの気づきがうかがえる。それは地域と自分を切り離そうとしない思考である。次にそのようなコメントをいくつか挙げてみよう。

地域学を学ぶには、その地域にある残酷なものも含めた歴史、今起こっていること、これから起こるであろうことを観察し、その中で自分がいかに生きていくかを見つめながら、ともに生きていく覚悟を決めることが必要になるのではないか。地域学とは何かを考える前に、自分の地域を見つめる姿勢が大切である。これからも共に生きていく地域を改めて見つめ直し、全ての関わりを大切にする姿勢をもって、自分なりの地域学を学ぶ前の基礎を作り上げていきたい。(地域教育学科)

このコメントに書かれているように、このような地域への向き合い方は「地域学を学ぶ前の基礎」と認識されている。そしてこのような類の「基礎」にずいぶん多くの学生が言及していることがこれらのレポート群から読み取れるのだ。

さらには「地域と共に生きる」というだけではなく、地域をあたかも人格のある主体のようにみなすコメントもみられる。そしてそこには地域への敬意があり、地域の「魂」の認識すらみられる。地域は研究の対象というよりもむしろ自分を包んでくれるものですらある。

地域から学ばせていただいているという姿勢をもってこれからも地域と関わりをもっていくという強い決意を自分もつようになったと実感した。地域学を学ぶまたは携わることによって、今後は自分という世界のドアの風通しをよくし、常にオープンな態度で何事にも関わっていきたい。



“地域のために”ということは、“私たち人間が生きていくために”や、“他の動物のために”ということも含まれるものと捉えることができ、いうなれば地域に生かしてもらっているということの一種の「恩返し」ということが言えるかもしれないのである。……少しへりくだった位置から、「地域」と対等な関係に近づけていくことが大切であるということであり、つまり、「地域」を尊敬できる他者として接していく形ということである。……「地域」と共に生きるという「覚悟」、……困難・煩わしさ等を背負う「覚悟」が必要である。そして「地域」に“ありがとう”と示すこと、「地域」を思い出すということが加えて必要であるとわたしは考える。……私たちの見る「地域」が生きるか、死ぬかも私たち自身の捉え方次第であり、その存在を忘れることによって生じる死を“魂の死”とするならば、誰もがその「地域」を忘れた時、思い出す人がなくなった時、その「地域」は死ぬのだろう。そのため、その「地域」を生き続けさせる、地域の「魂」を殺さないようにするためには私たちがその地域を考え、思い出すことしかないのではないだろうか。(地域政策学科)

「地域の魂」という見方はアカデミズムにおいてはナンセンスかもしれない。「研究者が対象を問う」のではなくむしろ人間が問われる、あるいは人間が地域を管理するのではなく、逆に人間が地域によって生かしてもらっているという発想がここにある。これは「身体や生命それ自体で自然との関係を取り結んでいた人々」(内山 2011:180)にとってはごく自然な発想かもしれないが、このようなまなざしの逆転ともいえるコメントがアカデミズムの中で発せられるのは意味のあることではないだろうか。次のコメントも地域による包摂や地域への感謝を述べている。

自分が包まれていることを自覚し、自分を包んでいるものを考え向き合うということだということにたどりついた。そしてそれをどう表現するのか、感謝するのか、そこが問われている。(地域政策学科)

そしてそのような地域への敬意あるいは地域との関係のつくり方は、次第に地域への責任へと転化していくように読み取れる。そこには自分たちこそが問われる存在であり、そして未来に責任をもつものであるという自覚の萌芽がみられるのではないだろうか。

本物を作る必要がどこにあるのか。私は、それは地域への責任だと思う。私たちの生きる地域というものは、決して「私たちだけで作った」地域ではない。……日々の生活の中に、伝統芸術の中に、受け継がれてきたものがあるのだ。だから、無責任に本物ではないものを作ることのリスクは大きい。(地域教育学科)

またこれは歴史性の視点で自己と地域をとらえていることがうかがえる。歴史性については後述する。

## 自分自身と向き合う

以上のような、近代的なアカデミズムにはみられなかった「考察対象と観察主体の関係性の逆転」とでも呼べるような地域への向き合い方は自分自身への向き合い方への反省をも促す。地域政策学

科の学生は次のように述べる。「地域学は地域の現実に向き合うだけではなく、自分自身とも向き合い、可能性を広げるという意味をもっている」。学生たちは自分の生き方について自問しはじめる。

コミュニティのあり方を検討する中で、自分の生き方についても考えるようになった。わたしの生きたい土地、生きていくべき土地はどこなのか。むしろ、私はその土地にいつ出会うことができるのであろうか、と。(地域政策学科)

地域学を考えるということは、私自身の生活を考えることにもつながると思う。なぜなら、他者のリアリティに触れることで、自分自身のなかで新しい何かが芽生える瞬間に遭遇することができるからである。……地域学とは人の暮らしを考えることであり、リアリティを追究することによって、自分の豊かな暮らしへとつながるものであると考える。そして本物にであることができるのである。(地域政策学科)

地域学総説の講義で、様々な視点から「地域学」を学んでいく中で、私は自分自身を見つめなおすきっかけを頂きました。今まで他人に合わせて流されるままに生きてきましたが、今一度自分自身を見直して、先を見据えて行動していこうと思っています。そうすることで将来就職した地で、その地域のために自分ができることを見つけられるのではないかと考えるからです。「地域学」とは自分自身を知って見つめ直し、そこから自分のできる最大限の力で、周り・地域・社会によい影響を与えられるような人材を育てる学問であると思います。(地域教育学科)

また、このような自己言及的なまなざしは「自分にできること」の模索につながっていくようだ。著名な講師たちの実践を直接聞いて「同じようなことをしようと思っても、きっとできない」と感じつつも、「いま、自分にできること」を模索していこうとする落ち着きとしたたかさが見られる。

私たちは、この方々と同じようなことをしようと思っても、きっとできないだろう。……しかしこの4人に共通して言えることは、どの方も「自分なりの問題発見をし、自分にできることを考え、実行している」とことにあると思う。私たちも「何とかしなければならない！」と自分が感じる問題を見つけ自分なりの問題を発見し、「いま、自分にできること」を常に考えながら実行していくことが、私たちの役割なのではないかと思う。(地域教育学科)

また、次のものは入学時の自分自身を振り返り、もう少し深く地域学を語れるようになった自分を発見しているコメントである。これも身の丈で思考し、実践しようとする意思の現われと読める。

私は2年前の地域学入門のレポートを読み返してみた。そこには、地域学部に入ったばかりの私が「地域学と何か」について何やら偉そうに語っていた。……今の私がこの時の私を振り返ってみると、ただ自分の中で知っている(分かっている)かのようなフリをしていたのかもしれない。それらしい言葉を並べて満足してしまっていたのだろうか。あれから2年間地域学に触れたり、地域調査実習を通して実際に地域について考え直すという経験を通して、今の私ならもう少し素直に「地域学」を語れる気がする。(地域政策学科)

次のレポートは問題を見て見ぬふりをしてきた自分、問題から逃げて「人任せ」にしていた自分を反省し、自分を地域との関係を再構築しようとしているものである。

私は4人の話を聞いたことによって、自分のあるこれらの問題によりやく気付くことができた。話を面白いと感じたのは、もちろんその人柄や実体験もあるだろうが、私たちが分かっているながら無視してきた、あるいは気付かないふりをしてきた問題に、逃げずに戦ったからではないか。私が地域学総説で得たのは、見て見ぬふりをしてきた自分、できないとあきらめていた自分に気付くことができたというものである。……「面倒くさい」「自分には関係ない」「できない」と逃げて、「時間が経てば何とかなる」「誰かがやってくれる」と人任せにする態度が、地域を生きていない「わたし」なのだ。「わたし」は地域をどう生きるのか、どう生かされているのか、地域学というものを学んでいる身として、もう無視することはできない。……できないとあきらめるのではなく、それを克服する勇気をもつことが必要だ。そうでなくては、地域を生きることも、つながりをとりもどすことも永遠に不可能となるだろう。  
(地域文化学科)

次のレポートにいたっては、『地域学』とはすなわち『自分学』だ」とまで言い切る。これへの異論はたくさん想定される。しかし、地域を客観的なモノのように扱うアプローチが社会科学では依然支配的であることを考えると、この学生の気付きは一見極端にも思えるものの、地域学の形成に貢献する可能性があるのではないだろうか。

「地域復興」「地域再生」という言葉を耳にすることがしばしばある。……以前の私ならその言葉もキーワードにして「地域」を見つめていただろう。けれども、復興、再生という言葉は、「地域」が壊れていることを前提にしているはずである。少なくとも今の私にとっては「地域」とは「再生」すべきものではない。再生するのならば、見つめなおすのならば、私たちの心の中なのではないかと思う。自分は、周りの人は幸せでいるだろうか。どうしたら幸福が続いていけるだろうか。そのために何をしてみたらいいのだろうか。そう問い直してみると、「自分」でもある世界、地域の姿が、将来像が見えてくるのではないだろうか。それらを自分の中に問い、そばにいる人に耳を貸すことのできる、そしてそれらを形にしていくことのできる人が「地域におけるキーパーソン」になるのかもしれない。……「地域学」とはすなわち「自分学」だ。……繰り返し悩み、反復し、問い直し、発見していくつもりである。(地域文化学科)

以上のように学生のコメントには自己言及性が高く、自己のポジショニングを問い直すものが多々みられた。すなわち地域を考えること、あるいは地域に向き合うことは、自分自身を見つめなおすことにつながると多くの学生は気付き始めたようだ。

#### IV. つながり さまざまなつながり

では、ここでは以上の「内省としての地域学」とでも呼べる発想から転じて、つながりについて

書かれたレポートをみていきたい。次にみられるのは、人と人、人と地域、地域と地域、あるいは歴史的つながりなど、多様なつながりのあり方について書かれている。

第2部の講義を聴いて、人は生きていくうえで、あらゆるものとの「つながり」によって生かされているのだと感じた。身近なところで、家族、友人など人との「つながり」に支えられて生きている。さらに言えば、今の私たちの生活は、これまで生きてきた人たちの経験や知恵の上に作られている。それは自然と共存する知恵であったり、人のつながりの強さであったり、教訓として残っているから作りえた今であると思う。まさに歴史の上で生かされていると言える。歴史を知ることは、私たちの今ここの土台を知ることでないかと思う。(地域政策学科)

今まで私は、地域における課題・問題の解決のためには、専門家やキーパーソンとなる人などの力が大事だと考えていた。……大切なのは専門家やキーパーソンだけではなく、専門性・専門家を上手く活かしながらも、その地域の住民が主体となって活動できることが地域づくりにおいて重要であると感じた。人と人とのつながり、人と地域とのつながり、地域と地域とのつながり、地域と歴史とのつながり……たくさんのつながりを通して、地域が成り立っているということがわかり、複雑に関わっている「つながり」を見つめ直し、考え、取り戻したり、新たにつくったりすることが「地域学」であると、この講義を通して私は考えた。(地域教育学科)

地域のことを外部のものとして客観的に考え、問題を解決しようとすることは他の学問分野でも可能なことであるが、地域のことを当事者の立場で、自分とつなげて考えていくことのできる学問といわれると、やはり地域学なのではないだろうか。……自分が様々なつながりの中で生かされていることを感じられ、その意味を考えていける学問ではないだろうか。このように、わたしの中で「つながり」とは、地域学で最も重要なものであると感じている。(地域政策学科)

現代の地域における一番の問題は「無縁社会」なのだろうと思う。これは一概には言えないが、やはり昔の地域は様々な問題に対して協力して「じぶんたちで」立ち向かうことで確かな関係を築いていた。いま必要とされているのはその確かな関係だろう。……こうした関係性の中に人は自分の存在を感じることができ、安心できる。そうした関係がしっかりと保たれ存在が確かである世界こそ「ローカルな世界」である。人々が様々な関係を感じられなくなっている現代こそいったん立ち戻ってその「ローカルな世界」を目指すべきなのだと思う。

(地域教育学科)

第2部の講義を受けて、これからの社会に求められるものは、人とのつながりであると私は考えたのである。そして、人と人とのつながりで生まれるものは地域である。……無限につながるたくさんの人々のために私たちができることは、等身大の自分自身を認めることである。ありのままの自分、弱さのある自分を認めることができれば、他人を認めることができる。……たくさんの人びとの心が豊かになれば、地域も豊かなものになっていく。……この

生きる地域を学んでいくのが、地域学である。地域学もまた生きている。地域学は、今まさに必要とされる学問である。(地域文化学科)

以上のように、様々なつながりが学生のレポートには描かれる。興味深いのは、それらはつながりそのものの考察というよりは、そのつながりのなかでの自分を見つめようとしていることだ。たとえば次のレポートは「私は地域から思われ、私は地域を思う」という関係性のあり方を模索している。

第2部講義が終わりに近づき、私は地域の誰かに思われるような存在であろうかということ考えた時、そうではないのではないかと感じ寂しく思った。……自分の大切なものが自分の手から離れていってしまうという言葉が胸に響いた。私たちは専門家任せにしてしまうことで、無意識のうちに大切なものを手放してしまっているが、それはあくまでも無意識であるので、それが本来自分の手にあるものだという当たり前のことでさえ忘れてしまっているということだった。これは人間関係も一緒ではないかと感じた。人は、思わなくなればどんどん忘れていく。どれだけ大切な人であっても、その人のことを考える時間が無意識のうちにだんだん少なくなれば、その人の存在は私の中から消えていく。……地域学の実践以前に、私は地域から思われ、私は地域を思うという関係を築き、それを「本物」にしていくことで、地域学の実践に必要な土台が完成していくのだと考えている。……私は、地域を思い、地域から思われる存在になること目指して、これからの自分自身と地域に向き合っていく、地域学を実践していきたいと思う。(地域政策学科)

このレポートも感覚的なものと片付けられてしまうおそれがあるが、一方で「地域学以前」の「必要な土台」を真摯に考えている重要な論点のように思える。

## 個人を越える

「地域を考えることはすなわち自分自身を考えることになる」というレポートを列挙してきた。ではそもそも「自分」というのはどのようにして成立しているのだろうか。筆者は別稿で「わたし」は個人に閉じられる存在ではなく、時空間を越えるいく人もの他者たちが重層的に織り込まれている存在だと議論したことがある(仲野 2011)。この時、「わたし」の課題は同時に「わたしたち」の課題となる。他者と自己との境界線は容易に引くことができなくなる。「地域学総説」を通して、このような気付きにいたった学生もいる。

そもそも「私」という存在自体が、もうすでに独立して存在しているのではなく、周りの関係が交差して結んだ焦点上にあるのではないかと、本当に迷い込んだ感じになった。それは、人と「私」との関係にしても、過去(時間、歴史)と「私」との関係にしても、自分と自分との関係にしても、「私」という存在が何かしらの関係のなかで存在していることは考えてみれば当たり前のことで、私はいったい当たり前のことをなんでいちいち例を挙げているのだろうと、わからなくなったのだ。しかし、そのいちいち挙げた関係は、当たり前のことであるにもかかわらず、私たちがいつの間にか失くしてしまった関係なのだと思う。かつては言葉にせずとも在ったものを失くしてしまったとき、それらを再びとりもどすには、こうして

いちいち言葉にしなければとりもどすことができない。4人の外部講師さんが言葉にされたこと、今私が言葉にしようとしている取り組みは、地域学での「つながり」と取り戻している過程にあたるのではないだろうかと考えた。(地域政策学科)

この学生は、講師の話から「個人の範囲をもう一度広げようとしている」という印象を受け、「自分の身体から思いが身体の外に溢れていくような、入ってくるような不思議な感じ」を経験する。

特に私は向谷地さんの「個人苦から世界苦へ」という言葉が深く印象に残っている。……近代は、個人が生まれつきのしがらみから解放されてばらばらになる過程で、「個人」の範囲をその人の身体だけに、「個人」の苦しみをたいてい自己責任とした。だが、向谷地さんの「個人苦から世界苦へ」は、近代で当たり前であったこのような個人の範囲をもう一度広げようとしている。これは、自分の身体を取り戻すことであると同時に、自分の身体から思いが身体の外に溢れていくような、入ってくるような不思議な感じがする。……4人の外部講師さんに共通していた「他人任せにしない」という姿勢は、「つながり」をとりもどすために不可欠な要素だったのだ。(地域政策学科)

このように「個人」というものを感覚的に、あるいは論理的に乗り越えようとする学生の姿がみえる。

## 歴史性

以上、「つながり」に関連する学生たちのコメントを紹介してきた。2011年度の「地域学総説」の第2部のテーマが「歴史性」であったことも大きな理由であろうが、歴史的なつながりについて想いをめぐらせたレポートも多かった。地域文化学科の学生は「私たちは長い歴史の連続性の中で生かされているということである」というシンプルだが（だからこそ）重要なことに気付いた。

講義を聞いていく中で、まったく見えていなかった「歴史」と「地域学」のつながりが見えてきた。また「地域学」と「つながり」、「関係」ということばは切り離せないもののように思えた。「つながり」、「関係」というものは、歴史的につくられたものであり、歴史の積み重ねなくしてあり得ないものである。過去を知ることが、いまをより良く生きるためのヒントとなり、そして、今を記録に残すことで、それが未来にもつながっていく。……「歴史性」を学ぶこと、記録を残すことは、「地域学」の原点、基礎・基盤になるのだと感じた。(地域教育学科)

私がこれまで考えてきた地域学では、「過去」のことをあまり意識せず、重要視していなかったと考える。……表面的に考えており、ある人が何かをやっているといううわべだけのことに注目してしまっていたと考える。……地域というものを考える上で「過去」というのはたいへん重要視しなければならないものであると考えさせられた。……そのためにも「過去を今や未来へと繋いで活かす」というのは、重要かつ必要な取り組みであると考えた。(地域政策学科)

私は地域学総説第 1 回目のレポートで……「つながり」はかつての地域におけるつながりを取り戻すというのではなく、新たな「つながり」を造っていくことが必要であると考えた。……人びとのニーズや社会の状況も変わっていくから、……時代に対応した現代版のつながりに再構築しなければならないのではないかと考えたからだ。しかし、地域学総説の第 2 部を聴いて考えが少し変わった。その地域の幸せを考えていく上で、何も時代にあわせて新しいつながりを考えていかななくてもよいのではないかと考えるようになった。……先祖が伝えてきた文化や風土、自然というものは時代が移り変わってもそこに長くあるものであり、そうしたやすく変わることはないだろう。……そもそも、祖先の残してくれた「つながり」を理解せずに新しい「つながり」はできるわけがないと考えるようになった。(地域政策学科)

以上は比較的シンプルに「歴史」としてのつながりに言及したコメントだった。

次に紹介するのは、特に「死者」に着目したものである。これは主に講師の内山節の思想に影響を受けたものと思われる。おそらく死者をも含めて目の前の地域を考えるということなど、それまでは思いもつかなかった発想だったのではないだろうか。

「生きる」ということは、自分で問いを立てて自分で考えていく中で湧いてきた「意思」を後世に繋ぐことであると考察した。……死者がつくった土台、つまりは人々による努力があったから今の生活が成り立つと考えられている。……死者の努力をないがしろにして生きている人間のためだけの世界を作ってはいけないと呼びかけている。……地域学の観点から考えられる「生きる」ということは、一つに先人たちの「意思」を継ぐこと、二つに受け継いだ「意思」と内に湧いた「意思」で自分の「意思」をかたちづくること、三つに自分の「意思」を後世に繋ぐことであり、バトンパスを繰り返すリレーのようなものだと言える。(地域政策学科)

人々の努力のバトンが受け継がれて今の私たちの生活があるのだと知った。今目の前にある地域を見つめるだけではなく、過去にあった地域を見返し、人々の積み重ねを思い返すことが大切なのである。内山氏の言葉に「死者は死んでいない」とあったが、その言葉はとても衝撃的だった。その土地で私たちを見守りながら生き続けているのだと考えると、この考え方はとても素敵だなと思った。私たちの生活や死者が代々つくって来たこの土地で営まれているのだと知り、とてもありがたく感じた。それと同時に、私たちが住む地域は私たちだけのものではなく、私たちの先祖や未来の子どもたちのための地域なのだと考えた。今住んでいる地域をどう未来に受け継いでいくかを考えながら暮らしていくことが重要なのである。(地域教育学科)

「バトンを受け継ぐ」という表現が散見されるのも興味深い。現実的には生きているこの私が死者からバトンを受け取っているという発想はなかなか出てこないだろう。学生たちの視野は、空間的にも時間的にもよりいっそう開かれ、そして教員の地域観を逆に問い返しているようにも思える。

また、死者たちがつくりあげてきた土台の上には自分は生かされているという気づきから、「『いま』や『地域』を半端な気持ちでは生きていられない」という覚悟にも似た緊張感が漂うコメントもある。それは次のものである。

「関係」「つながり」は今だけに限ったものではなくて、死者たちが築き上げてきた土台が関わり、歴史とも関係する。……「地域」には亡くなった人々の教訓があり、なくなった人々が作り上げてきた土台の上の地域に、現在の私が生かされていると思うと、「いま」や「地域」を半端な気持ちでは生きていられないと思ったのである。(地域政策学科)

## 確かな関係

ここまで「地域学総説」によって得られた自己言及的な視点、人や自然とのつながりのあり方、または人間や自然あるいは歴史的な多様なつながり方について書かれたコメント群を挙げてきた。そのようなつながりは「確かな関係」を生み出すことに触れたレポートも少なくなかった。地域政策学科のある学生はこのように言う。「村には先人の知恵や人と人とのつながりや祀りごとなど、先人たちが生きてきた証が多く存在している。それを受け継いでいく中で蓄積された『確かな関係』がそこにはある」。また別の学生は次のように述べる。

第2部の講義で私が受け止めたものは、歴史とつながることが地域を知る第一歩であり、地域を作っていく土台となるということだ。……そして土地を支えている習慣や思想、先人たちが残してきたものに目を向けることも必要である。なぜならそこから土地の豊かさを目の当たりにすることができるからだ。そこには本物が隠れている。……私たちの知性の領域では越えることができない。そこに、「確かな関係」の必要性があると考えるのだ。だから、土地に昔から備わってきた豊かさをもう一度掘り起こし、人びとの手に返し、受け継いでいく必要があると考えるのである。(地域政策学科)

内山節は巨大システムによって支配され、素人が介入できない社会のあり方に警鐘を鳴らしている。それは、たとえば「原発は安全である」というような知の世界が作り出すイメージに振り回される世界である。それに対して「身体や生命それ自体で自然との関係を取り結ぶ」ことを「確かな関係」と呼ぶ。それは人と自然との関係のみならず、人と人との関係でもある(内山 2011:177-181)。学生たちも、地域学から「確かな関係」の重要性に気付き始めたようだ。

## 自分の役割

さらなる自己言及的な気付きとして、自分の役割を見つめているコメントも多かった。それは次のコメントに表現されているような素朴な覚悟とでも呼べるものである。

私は地域で今までどのように生きてきたのか、これからどのように生きていきたいのかということ意識して考えなければならないと感じた。家族や友だち、歴史、地域などさまざまな関係によって、今ここに私は存在している。地域と自分とは切り離せないし、地域で暮らしていればとにかくたくさんの人にも出会う。地域や歴史、人とのつながり、そのときそのときの出会いを大切にして実践を積み重ねていくことで地域学もさらに深まると思った。(地域教育学科)

「ないものねだりをやめてあるもの探しを」というのも、新しいものばかりが重要なのでは



なく、今あるもの、これまで大切にされてきたこと（祖先が作ってきたもの）を受け継ぐことのほうが大事なことだということではないか。そうすると「今」という時を記録するのは私たちの役割である。（地域政策学科）

上のレポートには後世に地域を手渡そうとする意思が感じられる。また次のようなコメントもあった。

歴史の視点をもつということは、未来を見据えるということと同義であると思う。私たちがいつか過去の人々の一員となったとき、その時に生きている人に新たな知恵と知識を残しておかなくてはならない。生と死の連続性の中で生きていくということは、そのような責任を担うことでもあるのだ。（地域文化学科）

ここには地域を担っていくことの責任が創出されつつある。

## V. 実践，行動すること まずやってみる

ではここからは学生のレポートにみられる「実践」あるいは「行動」に関するコメントを列挙していく。地域環境学科の学生は次のように言う。「しっかりと地域学とは何かを自分なりに考えたあとなら、人びとの取り組みも違ってみえてくることもあると思う。今回の講師の方々の活動を参考にしながら、自分にできることをやってみようと思った」。

このように「まずやってみる」という意思が読み取れるレポートが散見された。

わたしの考える地域学，そして学びはまずやってみることから全てが始まります。最初はやらない言い訳やできない理由をさがす癖がついてなかなか治せませんでした。しかし……口だけで行政や政策の批判をする人間にはなりたくありませんでした。……毎日少しずつ気づきを積み重ねていく中で、私の地域学に対するイメージは大きく変わりました。私の中で地域学とは「まず一歩目を踏み出してみること」です。（地域政策学科）

今すぐにでもできること、己の日々や周辺の関係を見つめなおす、当たり前を疑って構築しなおすことから実践を始めてみようと考えます。（地域教育学科）

自己を反省することから第一歩を踏み出そうという意思が感じられる。また、これに関連して「現場に足を運ぶ」ということの重要性も言及されている。

現場に足を運ぶことの大切さを学んだ。……現場を訪れることにより、吉本さんの言っておられた「生きる力」に出会うことができるのだ。（地域政策学科）

## 身の丈で自分にできること

実践者の講義を聞いて、事例を学んで、ではいったいこの自分には何ができるのだろうか——これは課題に真摯に向き合えば向き合うほど抱える苦悩ではないだろうか。以下に紹介するのは、必

ずしも「地域学の実践」とは言いがたいかもしれない。しかし文字どおり自分の周りで、自分の足元で自分にできることをやろうという覚悟の表明だ。

身の丈にあうことから始めるといっても、地域学部の学生と限定しただけでも出発点はそれぞれ違うだろう。私は地域学部生だけが実践できることを見つけた。それは年に1回ある地域学学部学生総会に出席することである。……身の丈にあったことで良いのならば、年に1回だけの「ここ」から始めても良いのではないかと私は今考えている。(地域文化学科)

私は「地域学」を実践する上で重要なのは、地域で何か疑問を感じたり困ったことに会ったりしたときはすぐに動くこと、そしてそれがどんなに小さなことであっても、自分の力で行うことだということに気付いた。それを忘れなければ、「地域学」はきっと「誰でも、いつでも、どこでも」できる学問なのだと思う。講師の方々が、立場や地域は違っても、それぞれの「地域学」を実践しておられたように、私も小さなことではあるが、あいさつをしたり、地域のお祭りに参加したりして、自分の周りの関係に気付くことから、私の「地域学」を実践していきたいと思う。(地域文化学科)

「地域」の魅力を理解することができたら、次は何をしていくべきなのかという疑問に私なりの答えを出せたように思う。……それはそのときそのときの魅力にあふれた地域の姿を、記憶そして記録に残しておくこと、そしてそれを外部とのつながりのきっかけにすることだと思ふのである。……地域の姿を記憶そして記録に残しておく方法として、私は写真を撮りたいと考えている。……人々が自分の地域に誇りをもてるようになったのなら、それを外に向けて発信して広げていかなければいけない。……講義を通してこれらのことを私は自分で実現したいと感じた。人々の記憶、そして記録に「過去」「今」の地域を残し、「未来」の地域へとつなげていく。これが私なりの地域学であり、つながりをとりもどす手段である。(地域文化学科)

「学生総会への出席」「挨拶の実践」「地域の祭への参加」「写真を撮ること」——これらは一見地域学とは何の関係もないことのように思える。少なくとも、地域(学)と向き合い、自分の生きざまを考えるとという真摯な思考のプロセスを経ずに挨拶の励行を唱えてもあまり説得力はないだろう。それどころか単なるお題目に終わってしまうおそれがある。しかし、これらの表明が強い説得力を持つのは、地域学の文脈で思考し、これまでの自分自身を内省するプロセスを経た上で、自分の言葉として発せられているからだろう。確かに挨拶そのものは「地域活性化」に直結するような行為ではない。しかし、自分のことを棚上げにした学問の無意味さをこの学生たちは深く理解したのではないだろうか。

## VI. 地域学の可能性 地域学イメージの変化

「地域学総説」の受講は3年次であり、それはそれまでの2年間の地域学部での学びを振り返るきっかけにもなるようだ。ほとんどの学生は地域学を理解して入学してくるわけではない。むしろこのとらえどころのない学問に戸惑い、不安さえ覚えて大学生活を開始する。

地域環境学科の学生はこう振り返る。「当初私の思っていた地域・地域学というのはいい意味で裏切られ、もっと自分に関係の深い学問なのだとわかり、とてもおもしろいと思った」。ここでは、ぼんやりとした地域学イメージが少しずつ変容していく様子や、次第に輪郭を描けるようになるプロセスに関するコメントを列挙する。

わたしの中で「地域学」というものはやはりはっきりしない。……その理由は既存の学問体系と明らかに異なるからではないかというのが現時点での私の考えである。……地域学は既存の学問を地域という枠で横断的に見ることを目的としながらも、既存の学問のような体系からはみ出た存在になりつつあると思う。(地域政策学科)

地域学総説でつながりを取りもどすというテーマのもとに再び地域学への考えを深めていって、ぼんやりとしていたものに明確な輪郭ができたように感じる。地域学で考える問題は、国や地方の団体が考えるような外から見たものではなく、そこに暮らす人が見つけた、暮らす人だからこそわかるものなのだと感じた。(地域教育学科)

新入生の多くは「地域学」と聞くと「地域活性化やまちおこし」という抽象的なことを連想するようだ。それらの言葉はイメージにとどまるマジックワードともいえるかもしれない。

入学当初の私は地域学に対して「地域活性化やまちおこしが中心となるのだろう」と単純に考えていた。……この3年間地域学を受講していく中で、地域を考える際に重要なのは「目に見える活性化」だけではなく「見えない活性化」なのではないかと思うようになった。活性化というよりは豊かさと言った方がいいかもしれない。この「見えない豊かさ」には……多くのつながりがあることが前提になる。(地域文化学科)

勉強し始める前までは地域学に関する特別な知識を身につける授業が多いのではないかと考えていた。しかし、実際に「地域学入門」「地域学総説」を受けてみると、特別なことを勉強するというより、自分の生活や地域というものに対する考えを見直すなど、とても身近な内容の講義が多いと感じた。(地域文化学科)

第2部の外部講師である内山節さん、森まゆみさん、吉本哲郎さん、向谷地生良さんの4人は……まさに「地域学」の専門家だと呼べるのではないのでしょうか。「純粋な地域学の専門家は存在しないのではないだろうか」と前回考えましたが、考えを改める必要がありそうです。そして地域学とは人と人とをつないでいく学問だと思います。(地域環境学科)

私はこれまでの大学生活で地域学を懸命に学んできたつもりであったが、それは知識に埋められた「地域学」であったように思う。……授業の中で数回地域に出てそこに暮らす人々からお話をうかがうこともあったが、圧倒的にその回数が少なかった。……地域に出向き、地域の現状を知ること、これを増やすことが今後地域学を学んでいく上での重要な点の1つであるとを感じる。……分析者として「地域に出て行く」一方で、「地域にいる」ということを大事にしていきたいのである。地域に住んでいれば、意識しなくとも近所のおじさん、おばさ

ん、ふとした光景、出来事から自然と地域について知ることができる瞬間がある。これを意識的にみること、いままで以上に地域について学べるが増えてくるのではないかと思う。……地域学総説では、今まで自分が考えていた地域学の再認識、そして、これから地域学を学んでいく上ですべきことを発見することができた。今私が学んでいる独自の視点を切り開いていくように努力し、地域に積極的に繰り返し地域と深くかかわっていきたい。(地域環境学科)

このコメントからは、観察者と対象、分析者と住民などの間を往復しながら、バランスよく地域に関わっていく、あるいは地域学を深めようという学生の意思が読みとれるようである。

また、地域学に担い手についての記述も多かった。地域政策学科の学生は「地域学において主体は私たち住民で現場（地域）がその基盤だ。……地域学は誰の中にも存在するものなので、誰にも遠慮することなく実行できる」と述べている。ゲストの講師たちの実践はとてもまねなどでできず、手の届かないもののように思いがちだろう。しかし、これらの学生のコメントからは、様々な人びとの生きざまや覚悟、そしてそこから生まれてくる可能性や希望が実は自分のものでもあることを学生たちが自覚している様子が読み取れる。ここに列挙した学生たちの身の丈にあった実践のイメージも、一見非常に些細なことのように見えるが、その根底には自らの「実践」に対する学生たちの確かな、あるいは静かな覚悟があるのではないだろうか。

学者ではなくその場に生きる生活者が主体の学問であるように思う。……地域学のスタイルは、客観性にのみ重きをおき、生活者を置き去りにしてきた既存の学問体系への挑戦でもあるように感じる。(地域政策学科)

地域学は専門家のためのものではなく、私のような普通に地域で生きる一市民がその作法を学ぶことで自身の地域を少しでも住みよい場所だと感じるができる手助けをするものであってほしいと思う。その過程は自分が核となるので決して楽なものではないが、人任せにすることができないからこそ、私たちそれぞれがとりもどさなければならない「つながり」を再構築していくものになる。(地域政策学科)

一般的に、ある程度アカデミズムの訓練を受けた人間でないとなんかの学問の担い手になることは難しいとされる。しかし学生たちは、「生活者が学問の主体」と述べたり、「一市民」こそが学ぶべきだという。そして地域学は「生活者を置き去りにしてきた既存の学問体系への挑戦」だとすらいうのだ。

## 足もとから考える

ここでは地域学の方法論的なアプローチについてのコメントを記す。多かったのは「自分の足もとから考える」という発想である。

4人とも私たちの考える「当たり前」の考え方を覚えてくれた。……周りを見ているようで、実は自分のことを見ていないがために理解できていないのではないか。自分の地域の中身を知らずして他地域のことを勉強しても、いつか自分の心のどこかで納得できていない部分が出てくる。自らの足もとを見つめ直し、問題・課題を見つけ、立ち向かっていかななくてはなら

ない。今回の4人の外部講師の人たちは私に新しい気づきを与えてくれた。(地域教育学科)

地域学とはおばあちゃんの知恵袋のような、困った時に頼りになる昔の人の知恵がつまった歴史の産物です。またその時々の人々がつくり上げたドラマでもあります。今回は復興や再生に着目して地域学について考えてみましたが、水俣の件や炊き出しを行う主婦や外国人などのお話を聞き、未来に見通しがもてたと同時に希望が見えてきたような気がしました。(地域教育学科)

世界で起きたたくさん問題を、ただやみくもに考えると言うことではなく、まずは地域に暮らしている自分自身を考えること。身近な問題を考えること。それが地域学を学ぶ上でまず、第一に必要とされることではないだろうか。私たちは、自分自身と身近なものを見つめなおすことで、当たり前のように周りに存在する他者に気づくことができる。気づかなかった人とかかわりを見ることができる。そして世界の広さを知り、人とのつながり、地域の密接さを知るのである。(地域文化学科)

今の私たちの現状は、地域における活性化や復興政策を考えたりしているが、本当にその地域を理解しているのか。その地域の歴史は、どのようなことが起きて今の地域になったのか、……その地域の現状だけでなく、過去を知り、地域を根本から知り、リアルな地域を見るべきだと思います。また、地域を第三者の立場から見ただけではなく、自分もその地域の中のひとり、当事者であることを忘れてはなりません。さまざまな視点からとらえていくことで、その地域が今何を求めているのかが見えてくるのではないかと私は考えます。今回の地域学総説の講義を経て、地域学の難しさ、面白さを改めて実感することができました。(地域環境学科)

地域学を学び、深める上で大切なのは、実際に現地・現場を見ること、そこに生活する人を知り、その人々が作り上げた歴史を受け止めることだと思う。……環境学科では、調査実習をはじめとして様々な実験・実習を行い、実際に自分の身体で体験することが多い。そうして学んだことは、ただ本やウェブサイトから得た知識とは全く違うものだと感じる。そこには知識としてのデータだけでなく、五感で感じた感覚や感情といった現場でしか得られないデータが蓄積されるのである。……データを見て机上の計算をするのではなく、実際に自分の足で現場を見ること、自分の目で確かめ、触れて感じる事が地域学には必要なことだと、第2部の講義で強く実感した。(地域環境学科)

以上の視点は、たいへんローカルで、足もとから地域をみるという方法を基礎としている。それに対し、グローバルな視点が重要だとする考え方もあった。たとえば次のコメントである。

「ローカルに生きる」だけでは無視することになってしまう問題が現時点でたくさんある。……世界のどこかで、自分があったこともない人々が、自分のせいで不幸な目にあい、自分が人生で一回も行ったことのない場所の生態系が破壊される手伝いを自分がしているのは、ただそれだけでひとりの人間として無視できない事実だと思う。……自分や、自分の子ども

の未来といったローカルな世界の将来に深く関わってくることになるだろう。……その一方で、世界にばかり目を向けてローカルから目を逸らすのは、実感を伴った現実世界から離れて生きているようなものである。……「ローカルな世界」にいるということに対して、私は自分自身の答えを見つけ切ってはいない。ただ、世界を見つめ、自分が世界に与えている影響を自覚し、自分の地域を大切にすることができる人間になりたいと強く思った。(地域環境学科)

このコメントは、ローカルな視点に対してグローバルな視点の優越性を訴えているわけではないことがわかる。むしろローカルとグローバルの往復をし続けることによって地域を大切にできると考えている。このような地域の範囲をめぐる学生の格闘にも私たちは留意すべきだろう。

### この時代の課題と地域学の可能性

地域学はこの時代の課題に向き合うための学問である。それは時代の最先端を生き、この時代の課題に直面している若い学生ならではの感性の力によるものなのではないだろうか。そして学生は、地域学が時代を生きるための方法になるだろうとその希望を語っている。

今の世の中は暗すぎる。特に日本は真っ暗である。少なくとも私はそういうふうに感じている。……今後日本で生きていくのが怖い。そして自分の子どもの未来を考えると胸が強く締め付けられる。しかしこの地域学総説の講義を通して安心できることがあった。それはそういった社会の複雑性をひも解く方法がいくつもあることを事例として享受できたことである。(地域政策学科)

また、自分自身が人を繋ぐ媒介者になるという意思の表明もみられる。

人びとのつながりが失われ、世代間のつながりも失われてしまっているために、記憶がちゃんと後世に受け継がれなかったのだと思う。私たちのような地域学を学ぶ者が媒体となって、人々をつなげていかなければならないのではないかと私は思う。(地域政策学科)

地域の中に入り地域の現実と向き合っ積極的に動いている講師の方々は地域の価値を守っている地域学の実践者以外の何者でもないであろう。このような姿を見ると、自分も地域学の実践者になれるのかもしれないという希望も見えてくるような気がする。つまり、地域学は特別な知識や技術を持ち合わせて専門家でなくても、地域の価値を発見して、育て、関わろうとする活動によって、地域学の担い手となり、実践者になれるという希望である。(地域政策学科)

これから私が地域学を進める上で注意したいことは、地域を活性化するという漠然とした目標にとらわれて、新たな価値につながる可能性を秘めた「当たり前」の小さな価値を失ったり、見落とさないということである。……地域全体が地域にある価値を当たり前とらえてしまえば、風化することもあるだろう。それが次々と失われていく状況は、地域の価値もだんだん、気づかないうちに失ってしまうということではないだろうか。その状況に気づいて

いる私たちが食い止めなければならないのである。(地域政策学科)

(「見えない豊かさ」が大切だという)理屈を言うのは本当に簡単である。はっきり言って綺麗事だとすら感じる。現に私たちは巨大システムの中に組み込まれて、それに沿って生きていくのが便利だとわかっている。けれども、便利であっても、そこには「ひとりひとりの安心」は保障されていない。私たちは単に見たくないものからずっと目を逸らしてきただけだった。……先人が残した今を、私たちは次の世代に繋がなければならない。(地域文化学科)

以上のような、この時代を生きる若い覚悟が今回のレポート群のなかに散見されたのもひとつの特長である。

### 自分の専門領域でとらえなおす

ここでは、自分の現在の専門領域から地域学をとらえたコメントを記したい。その多くは教員免許を取得する地域教育学科の学生と自然科学を専攻する地域環境学科の学生のコメントだった。

私は将来、教育関係の仕事に就こうと考えている。その時に、ただ教育は教師が学校で行うもので、教育をよくするためにはその技術を磨くことが大切だと考えるのではなく、その周りにある子どもたちや私たちが取り囲まれている、地域の視点から教育という専門分野を捉えたときに、自分は何が問題だと感じ、どうしたらいいと思うのかということをしつかりと考えていきたい。そういう姿勢こそが教育学ではなく地域学を学んだ私たちの目指すところなのだと思う。(地域教育学科)

私は将来保育士を目指していますが、保育士とは「専門的知識及び技術をもって児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」……とされており、要するに保育の専門家です。現在保育にも様々な問題がありますが、私はこの地域学総説で学んだ専門家の在り方を念頭において問題を抱える人と関わっていくことが大切だと思います。(地域教育学科)

地域教育学科が地域学部であって教育学部ではない、その違いは何なのか。……教育学部で学んだ教師は教育の「専門家」である教師にはなれるでしょう。しかし保護者や地域での教育に関わる問題に関わる時にその当事者が「本当の意味で問題を知る」助けとなるような関わり方ができる専門家になれるのでしょうか。地域の当事者と共に考え悩むという考え方に触れた地域教育学科の出身者ならきっとそんな関わりをもてると思います。地域学部が地域のキーパーソンを育てることを目指しているのなら、そんな関わり方ができるような人だろうと思います。(地域教育学科)

私は……将来は特別支援学校での教員も視野に入れて学習をしている。……私達が地域学をいかして、障害のある人と地域の人達が交流する場を設けることができれば、地域の方々の障害をもつ人達に対する理解が深まり、浦河町のようにみなが共に生活できるような地域ができるのではないだろうか。(地域教育学科)

人間を含めた生物とそれらが生活している地域について考えることが大切だと感じた。……私は人間と自然が共生していくために話すことのできない自然の代弁者、つまり地域のキーパーソンとなって役割を果たしたい。(地域環境学科)

私たちに求められているのは、それぞれの学科で学んでいる専門的な知識を地域学に組み込んでいくことだと思う。……専門的な知識と地域を見つめる視点を持ち、他の学問では思いつかないようなことをするのが自分たちの役目だと思った。(地域環境学科)

鳥取大学には地域学部の他にも、医学部、農学部、工学部がありますが、これ以外にも大学に設置されている学部は社会の発展や人びとの暮らしを豊かにしてゆくという普遍的な目的があると考えています。しかし、それらは失敗するとたちまち暴走し、人びとのニーズに合わなく、独善的になってしまう可能性があると思います。その中で地域学は実際に人びとの姿を見つめ、話を聞き、交流をしてゆくことで、そこに住んでいる人々が本当に求めていることは何なのかということを考えていけるという点で真に人びとの幸せを願い、人びとの希望をとりもどすことができる唯一の学問なのではないかと考えています。(地域環境学科)

果たして地域学が「真に人びとの幸せを願い、人びとの希望をとりもどすことができる唯一の学問」かどうかについては丁寧な議論が必要だろう。ここで重要なのはその真偽ではなく、学生がそう考えているということそれ自体である。ここにも、自分の専門領域から地域学をとらえた若い意思が読み取れる。

### ともに学ぶこと——地域学総説の意義

今回のレポートには「地域学総説」が3年次で再び全4学科が一堂に会して学ぶ機会であることに関する記述も多かった。それらは、概ね、自分とは専門を異にする同級生たちと同じ教室で共に学ぶ機会の重要性を語っていた。地域学部では1年次に入学してすぐ4学科合同の「地域学入門」が開講されている。それ以降、4学科が同じ教室で共に学ぶ機会は3年次開講の「地域学総説」だけである。

地域教育学科の学生は次のように書いている。「地域学総説を終えた後は教育という分野に集中した学びが中心になると思うが、地域学入門や地域学総説で得たことを忘れずにいかせるように学んでいきたい」。日ごろ自分の学科で学んでいる専門領域の外部にも目を向けながら地域学を学べるのは「地域学総説」だけなのである。学生のレポートには仲間たちと共に学ぶことによって、自分の学科内に留まっていたは得られない気付きがあることに触れているレポートが多い。

私が地域学を考える第一歩であると考え、この“気付き”を得られるのは先生や外部講師の方の話を聞いたときだけではない。同じ学科の友人たちも自分とは違うものを見つめて、触れて生きてきた、異なった視点をもっている存在なのだ。……さらに他学科であれば自分とは異なる分野の学びを積んできている人もいるというこの授業の形態であれば、そのような自分と異なった視点はもっともっと広がっていくだろう。3年生という今の段階でのそれぞれの気付きやこの授業を通して地域学をどのように捉えるようになったかを言い合うこと



で、それを聞いている他者に新たな視点を投げかけることになる。自分たちの考えを伝え合うこと、“気付き”の交換から地域学は生まれるというのがわたしの考える地域学の形だ。(地域教育学科)

3年生になって改めて地域学というものを学んで、1・2年で考えていた地域学では考えたことのないことをたくさん聞くことができた。1・2年では主に地域と学校と家庭を協力し、地域の子どもを周りにいる大人たち全体で育てていこう、というような教育の面からでしか考えていなかった。今回、第1部・第2部の講義を聴いて、地域学を考える際に歴史や文化の面・自然の面から考える重要性を知った。(地域教育学科)

地域環境学科は他の学科に比べると学問の幅が広く、化学、地学、地形学、生態学、行動学、考古学など様々なものを学ぶが、地域学総説の講義を受ける学生はそれ以外に、教育や文化、政策について学んでいるので、地域学のどれにも共通するものであるはずである。よって、その多くの学問を持ち寄り、議論していくものなのではないか。学問を身につけなくても、個人が思う「地域」について話していくことも「地域学」なのではないか。(地域環境学科)

今回大学3年生という時にもう一度地域学について改めて考えるという事はとても重要なことだと感じた。この大学生活の中で「地域」「地域学」について明確な答えは出せなくても、今までの講義、そしてこれから学ぶこと全てが意味のあるものであるようにこれからも「地域学」を学んでいこうと思う。大学を出て社会に出た後は今まで以上に「地域」というものが重要になっていくと感じる。だから大学で学べている私たちは恵まれており、社会ではその知識を生かして周りの人を引っ張っていき、そして共に自分なりの「地域」を創っていかなければならないと感じた。(地域環境学科)

その一方で、3年次になぜわざわざ自分の専門領域の外側のことを、他の学科の学生たちと一緒に学ばなければならないのか、当初は戸惑ったというコメントもあった。

「なぜ、今違う学科と同じ講義を受けなければならないのか。意味があるのか」と思っていた。でもそうやって自分のやりたいことばかりに目を向けて進めていくのではなく、各分野の方法を取り入れることが必要であるから、地域学部が集まって講義を受けることは大事なのだと今では思えるようになった。(地域教育学科)

しかし、「地域学総説」の空間で、講師、学生、教員と共に学ぶことの力が少しずつわかってきたようだ。また本稿の前半に講師から学生が受けた衝撃を整理したが、講師の招聘する必要性についてのコメントもあった。

「地域学」を一過性のものにしないためにも、「実践的」な仕掛けを学生ないし学部としても行っていくべきだと思うし、外部から講師を招く地域学総説的な学びを継続していく必要性を実感した。地域から学ばせていただいているという姿勢をもってこれからも地域と関わりをもっていくという強い決意を自分もつようになったと実感した。地域学を学ぶまたは携

わることによって、今後は自分という世界のドアの風通しをよくし、常にオープンな態度で何事にも関わっていきたい。(地域政策学科)

学部の教員では伝えられない実践の力、あるいは経験の重みに直に会うことは地域学を学ぶ学生にとってはたいへん重要なことであろう。もしかしたら、本稿の前半でも記したように、それは専門的な知識を伝授してもらおうということとは別に、実践者自身の生き様や存在感に触れるということの重要性があるようだ。

学生レポートの引用の最後として、次に地域環境学科の学生のものを紹介する。この学生は、「地域のスペシャリスト」になりたいと意気揚々と本学部に入學したが、「地域学」という一般的にはまだ広く知られていない学問領域に実際に身をおき、自分でもよくわからないことを他者に説明することの困難を経験した。これはおそらくこの学部の多くの学生が経験することである。

これは単なる「説明のしづらさ」という問題にとどまらず、学生自身の存在的不安やアイデンティティの不安定さにも関わる問題となってくる。それは具体的には友人や家族など身近な人たちへの説明の困難や、あるいは就職の面接の場における不安(の予感)として実感されているのだろう。ここに、自分が信じている地域学の役割や使命と地域学に対する社会的な認知状況との乖離を実感する学生の姿が見えてくる。

「地域のスペシャリスト」のような人間になりたいと思った……。 (地域学は) 誇るべき学問だと自負してもいいと思っているのに、何故、他の学問と比較し、説明しがたい劣等感のようなものを感じている自分がいるのだろうか。講義やその他の活動などを通して気づいたのは、地域の人たちのあくまでも上に立ってリーダーシップをとる、自分がいつの間にか確立していたこの構図が、私の中で異物になっているということだった。結局のところ、専門家や研究者として上に立ち、地域の人たちはそれ以外の存在である、ということのできる構図である。……今まで、私とそれ以外と明確に分けて考えていたが、そう考えていくと、私とそれを囲む「世界」との境目は本当にあるのだろうか。自分はどうやら世界からできているらしい。……誰かのために、何かのために、地域のために、ではなくて、自分のために、自分が幸福を感じて生きていくために、生きやすさのために、どうしたらいいのかを考える。そこから考えてみると、まずは自分が、そして家族が、友人が、その人たちが幸福であってほしいということに繋がっていく。……そんな風に地域に生きて、まちづくりに携わることができたらいいのではないか。(地域環境学科)

この学生は、大学での学びをとおして、自分が当初抱いていた「専門家・研究者」と「地域の人」という序列的な構図の限界や問題点に気付いた。そしてその構図が自分自身を呪縛していることにも気づいていく。

この学生の気づきで重要なのは、「専門家・研究者 - 地域の人」という序列化した構図の問題点のみならず、自分自身が独立した個人ではなく「世界からできている」一部分であることにも気付けたことだろう。さらには、「専門家が、地域のために、働く」という一方的な関係性の陥穽にも気づき、自分や自分の家族と友人が幸せになることの重要性したということではないだろうか。彼にとって、自己の幸福を追求することは地域が幸福になることと同義なのだろう。「私」と「公」を切り離し、あるいは対立的な関係性で両者をとらえる発想ではなく、「私」を大きく越えて無数の他者た

ちと時空間でつながった自分の存在を発見したということだろう。

自己像すなわち世界像を相対化し、これまでのイメージとは違いかたちで地域の担い手になっていく学生の姿がここに描かれているように思う。

## おわりに

本稿の目的は2011年度「地域学総説」の第2回レポートに表現された、外部講師として講義した実践者の経験を学生たちがどのように受け止めたのかを整理し、これから地域学教育を発展させていくためのひとつの資料として提示することだった。筆者がこの授業での学生の学びをピックアップし、カテゴリー化していくにつれて気付いたことがある。それは、学生がこの授業で得たものうち多くは「ディシプリン以前」とでも呼べるようなものであるということだ。それはたとえば地域課題への当事者性を伴う向き合い方や本気さといった生き様に関わるようなことが挙げられる。あるいは他者や地域とのつながり方や自分自身の相対化なども重要なポイントだろう。

もとより地域学独自の確固たるディシプリンがあるわけではない。学問的方法論はそれぞれ自分が所属する学科で学ぶことになる。だから「地域学総説」のレポートが「ディシプリン以前」と呼べる内容になるのは当然かもしれない。

ではこれらのレポートが「地域学以前」あるいは「ディシプリン以前」だから専門性の希薄な、学問的にはあまり意味のないものかということ、それは違うと考えられよう。「地域学以前」だからそれは常識的なことで、学生はあるいは教員は十分理解している、というわけではないかもしれない。むしろ、「地域学以前」だからこそ「地域学以前」なのに、それに対する十分な配慮をとらなかつた理解がなされにくいのかかもしれない。そして「地域学以前」を十分に身につけないままに「専門的知」を伝授する姿勢が身につけてしまっていることも考えられるのではないか。

本稿で紹介した一連のレポートは、いうまでもなく「地域学総説」の課題として学生が書いたものである。それはこの授業から学生が何を受け取ったのか、ということを表すデータでもある。それと同時に、ほとんど「ディシプリン以前」の水準で書かれているこのレポート群は、同時に地域学教育への提言として存在するのではないか。つまり、レポートは「学生が何を理解したのか」という学生評価の証左として用いられる一方で、「あなたたちは何をみて、そして何をみずに、地域学教育を行っているのか」という教員への問いかけのようにも読める。それは「自分なりの地域学を語れるようになれ」と問われ続け、格闘してきた学生たちの「では、あなたたちはどのように自分の言葉で地域学を語れるのか」という教員たちへの問い返しでもあろう。レポートの多くは一見拙い表現のように見えながらも、実はたいへん根源的で、自分の経験から発している問題提起が多いことに気付かされる。

これは換言すれば「専門家論」とでも呼ぶべき問題かもしれない。「専門家」について内山節は「専門家とは、専門領域でしかものを考えられない人のことである」と定義して議論を喚起している。

もちろん、ときに私たちは広い思考力をもった専門家に出会うことがある。だがその人たちは専門家ゆえに広い思考力をもっているのではなく、自分が身を置いている専門領域に対して批判の目をもっている、あるいは懐疑する目をもっているがゆえに、専門領域以外の思考方法も身につけているのである。それが広い思考力をつくりだした。……自分たちは知の専門家であるという意識が、知の高みに立った「村」をつくりだす。さらに人々はその専門性を認めることによって、この「村」は素人を排除した「自由な行動」を手に入れ

る。(内山 2011:176-177)

地域学とは、現実の地域課題に向き合うために従来の学問領域のディシプリンをもっと有用にするためのプラットフォームのようなものではないだろうか。つまり、必ずしも地域学独自のディシプリンがあるというよりは、従来の学問領域のディシプリンをこの時代の現実的な課題に応えるために、もっと使いやすくするために改良していくような役目とも考えられよう。だとすれば、地域学は必然的に「ディシプリン以前」にならざるを得ない。学生のレポート群は、この「ディシプリン以前」の思想や方法をもっと鍛え上げることの重要性を問うているように読める。

#### 参考文献

内山節, 2011, 『文明の災禍』新潮社.

鶴見俊輔, 2010, 『新しい風土記へ——鶴見俊輔座談——』朝日新書.

鳥越皓之, 2006, 「学問の実践と神の土地」新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編『地域の自立 シマの力 下』コモンズ, 276-294.

仲野誠, 2010, 「地域学教育の当面の成果——2010年度『地域学総説』受講生の最終レポートから——」『地域学論集』7(2), 197-219.

\_\_\_\_\_, 2011, 「生きられる地域のリアリティ——反省の学としての地域学を目指して——」柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編著『地域学入門——〈つながり〉をとりもどす——』ミネルヴァ書房, 104-125.

向谷地生良, 2009, 『技法以前——べてるの家のつくりかた——』医学書院.

柳原邦光, 2012, 「地域学総説の挑戦6」『地域学論集』8(3), 105-119.

(2012年2月3日受付, 2012年2月16日受理)